二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

退魔拳士キリカ

魔女の淫宴を呼び

小説　羽沢向一

挿絵　2号

序章　魔女の黒翼を砕け！　006
第一章　魔女の秘剣を倒せ！　029
第二章　魔女の邪姦を破れ！　057
第三章　魔女の媚罠を追え！　088
第四章　魔女の艶陣を崩せ！　123
第五章　魔女の淫宴を叩け！　174

登場人物紹介

Characters

東真キリカ

魔物の体に貼りついた符に直接打撃を打ち込む、砕魔拳を扱う退魔拳士。精悍な顔立ちで、露出度の高いスーツを身に纏う。

石渡守彦

キリカの助手をしている童顔の少年。強い霊力を持ち、幼い頃からキリカと共に育てられている。

メディア

魔女集団・媚融魔座のリーダー。呪符を使って闘う贄魔拳の拳士ながら、おっとりとした美貌を持つ。

シルシュ・シロッホ

媚融魔座の一員で凶悪な顔つきの美女姉妹。どちらも派手な装飾の黄金のビキニ鎧を着ている。

テミス

媚融魔座の一員。褐色の肌の情熱的な顔をした美女。

ヒルド

媚融魔座の一員。冷酷な表情のクールビューティー。

『第四章　魔女の艶陣を崩せ！』より　その１

「贄符！　いつの間に⁉」
胸の贄符は、スーツを盛り上げる乳房のふくらみに合わせて密着する。ショートパンツに貼られた贄符も、へその下から太腿の間に潜りこみ、べったりと貼りついた。
「こんなもの」
キリカは贄符の上に自分の符を合わせて、敵の攻撃を無力化しようとする。だがメディアが地面を滑るように移動して、超スピードでキリカの懐に入ってきた。
「立ち直ったようで、まだ反応が遅いですわね」
「くっ」
キリカが避けるよりも早く、子供のいたずらのように両手の人差し指で胸の贄符に触れられた。狙いすまして左右の乳首がつつかれる。
「はあああっ！」
乳首から高熱が発して、一瞬で乳房から身体中に広がった。両手が痺れて、符を離してしまう。いつもなら手から離れても思うままに動かせる符が、またもや風にさらわれたように遠くへ流れていった。身体の中に異様な感覚が渦まいて、まともに符をあつかうことができない。
高熱の波が引いて、キリカは自分の肉体を貫いた衝撃の正体を知った。
（き、気持ちいい……）

キリカもよく知っている感覚。
肉の快感だ。
笙子と違って、キリカは処女ではない。退魔師のなかでも自分の肉体を駆使して闘う砕魔拳士にとって、敵に肉体を狙われ、ときに肉の交わりを持たされることは必然だった。守彦には具体的なことは教えていないが、善悪を問わず魔術においてセックスは重大な要素なのだ。当然、肉体の快感も悦びも知っている。
しかし、ただ指先で触れられただけで、全身の力が抜けて、符を手放してしまうほどの快感など、味わったことがない。女の官能に予期していない火をつけ、強引に大きな炎を燃え上がらせる、容赦のない快感だ。
（異常だわ。こんなことはありえない）
目の前でメディアが微笑む。上品で、柔和で、同時に淫蕩な魅力を滴らせる笑顔。今のキリカにはとてつもなく恐ろしい顔だ。
「その贄符は、ここの地面のあちこちに小さく折りたたんで仕込んでおいたのですわ。なんといってもここはわたくしの空間ですもの」
メディアが右足を上げ、ハイヒールのつま先で、キリカの股間に貼りついた贄符に触れた。贄符とショートパンツ越しに恥丘のふくらみを押される。
「んあああっ！」

叫びながら、キリカはその場に膝をついた。メディアに触れられた股間から乳首以上の悦楽の電撃が発して、両脚から力が奪われた。立ち上がろうとしても、太腿がブルブルと震えて言うことを聞かない。

「ちゃんと感じているようですわね。キリカさんに貼ってさしあげたのは贄魔拳伝来の欲炎符ですわ。読んで字のごとく、人間の身体から肉欲の炎を引き出す贄符ですの。今のキリカさんの肉体は、どんな小さな刺激でも大きな快楽につながる、とっても敏感で淫乱になっていますのよ」

「そんな馬鹿なこと、誰が信じるのよ」

キリカは身悶えながらも、符を引き出そうとする。しかし、いつもなら特に意識しなくても別の空間から出せる符が、まったくつかむことができなかった。指は空をつかむばかりだ。

「あらまあ、強情ですこと」

メディアの両手がキリカの胸に当てられ、贄符の上からさわさわとなでまわした。普通ならただ触れられていると思うだけの弱い動きだ。それでもキリカは制御できない快感に襲われて、首をのけぞらせた。喉が上下に動き、赤い空を向いた口から喘ぎ声があふれる。

「うっん、んっ、あああ、馬鹿な、ああ、馬鹿なあ」

メディアの攻撃から逃れようと、キリカは膝をついたまま背後へ動いた。スローモーシ

ョンのようにゆっくりとしか脚が動いてくれない。メディアはワルツでも踊っているような優美な身のこなしで、難なくキリカについてくる。
「抵抗は無駄ですわ。欲炎符がかきたてる情欲の昂りは、身体の霊力を乱して、術を使えなくする効果もありますもの。今のキリカさんは砕魔拳をふるうこともできませんわ」
メディアがマントをひるがえして、すばやくキリカの背後にまわった。振りかえろうとするキリカの胴体に腕をまわして、スーツの腹の上で十本の指先を蜘蛛の足のようにすばやく動かした。
「あひっ、あああ、あううんっ！」
普段なら同じことをされても、ちょっとくすぐったいだけだろう。今のキリカには、剥き出しの快感神経を次々と弾かれているようなものだ。スーツ越しに胴体をつつかれると、そこから炎が噴き上がり、新たな性感スポットが生まれる。このままでは全身が性感帯にされてしまいそうだ。
「く、くそっ、なんとかして、はああ！」
身体をよじって逃れようとしても、快感の奔流に神経を満たされてしまって、まともに身体を動かす命令が伝えられない。ただ身体がカクカクと痙攣させられるばかりだ。
「うふふふ。いいですわ。わたくし、感じやすい女は大好きですのよ。もっともっと気持ちよくさせてあげたくなりますわ。キリカさんの下半身はどうですかしら」

メディアの手が脇腹から腰を滑り下りて、膝立ちの太腿をなでまわした。
「ううっんっ！」
太腿の筋肉が硬くこわばり、腰が跳ね上がった。身体が後ろへ傾き、メディアにもたれかかる姿勢になってしまう。あわてて起き上がろうとすると、また太腿をなでられて、腰の前後の動きを止められなくなる。
「キリカさんたら、かわいいあやつり人形みたいですわね。ますます気に入りましたわ」
メディアが再びキリカの正面にもどると、また胸をなでまわし、つま先を膝立ちのキリカの股間に押しつけた。巧みに足首のスナップをきかせて、貼りついた欲炎符に燃やされている女の部分に振動を送りこむ。
「ひあああ、うんっ！」
「んふ」
望まぬ肉悦を浴びせられて、悲鳴をほとばしらせる口を、メディアにふさがれた。キリカの唇に、魔女のやわらかくヌルリとした唇が重なり、ぴったりと吸いつく。
「んんんくうっ！」
キリカは懸命に顔を左右に振った。しかしメディアの唇が吸盤と化したように、何度顔を動かしても引き離せない。
（こいつ、離せ！）

メディアを突き飛ばそうと振り上げた両手に、赤いマントの両端がからみついた。材質不明のマントはふわふわとつかみどころのない感触でありながら、振りほどけない。両手を拘束されてしまう。

「くくくくくく」

と、自分の口の中にメディアの含み笑いが響くのがわかった。吐息とともに、温かい舌が侵入してくる。歯茎を舌先でなでられ、たっぷりと唾液を流しこまれた。

（甘い！）

キリカは目を見張った。口内を満たそうとするメディアの唾液は、人間とは思えない甘さだ。もしこれが普通の飲み物なら、素直に美味しいと感じるだろう。だが敵の体液と思うと不気味でしかたない。

「んんっ！　んううっ！」

「んくくくくく」

メディアの舌が鰻（うなぎ）のようにくねり、流しこんだ唾液とキリカの唾液を混ぜ合わせてくる。重なる二人の唇の隙間から、二人の唾液が滴り落ちて、なでられるキリカの胸を濡らした。

キスされながらいじられる胸は、ますます悦びを高めて、キリカの身体を熱く責めたてる。股間もハイヒールの甲でこすられ、摩擦熱のように快感が湧きあがってくる。たった三箇所を軽くさすられているだけで、全身をジリジリと炙られているようだ。

『第四章　魔女の艶陣を崩せ！』より　その２

「おまえっ！」
キリカは符を引き出すために、意識を集中しようとした。だが指先に霊力を集めようとすると、呼応して乳房と股間がカッと燃えて、身体に熱い肉欲が流れる。
「くうっ、はあああ」
スーツの上から胸を触手にこすられるだけで、大きく張りつめて敏感になった乳房に、耐えがたい快感の炎が燃え上がる。愉悦に炙られてたまらず身悶えると、ガチガチにしこりたった左右の乳首がスーツの裏側にこすれて、さらに淫猥な業火が大きくなった。
下半身でも、内腿の間で触手が何本も蠢き、レザーのショートパンツに粘液をなすりつけている。パンツの内側では、連続する刺激を受けて恥丘がわなわなと震え、肉唇がほころんだ。開いた秘裂の中心に、押されたレザーが押しつけられて、粘膜をかきみだされる。
「はひいっ！　おおおう！」
身体がこんな状態では、わずかに集めた霊力もたちまち乱れて、なんの効果も発揮できない。生まれ持った霊能も、鍛錬によって体得した砕魔拳の技も無に帰している。
（これではただの女と同じだ。なんのための修業を積んだんだ。父さんやお祖父さんに会わせる顔がない）
情欲に染まったキリカの顔に浮かぶ悔しさを、メディアが楽しげにながめた。
「うふふふふ。キリカさんもそれほど気に病むことはありませんわ。兎の会の他の皆さん

も、キリカさんのお友達の三笠笙子さんも、わたくしたちの手で快楽に堕とされたのですからね。ほら、キリカさんが気持ちよく腰を振っているところを、守彦くんもエッチな目で見ていますわよ」

「あっ」

キリカがハッとして視線をベッドへ移すと、守彦と目が合ってしまう。テミスとヒルドの手が守彦の顔を押さえつけて、無理やりにキリカへと向けているのだ。

（こんな不様な姿を、守彦に見られてしまうなんて……）

羞恥で、キリカの心臓が止まりそうになる。幼いころから守彦を護れと両親から言い聞かされてきたのだ。守彦の前で弱味を見せることなど考えられない。ましてや敗北して敵に嬲られる姿を見られるのは、最大の恥辱だ。

だが恥辱ははじまったばかりだった。

キリカの両脚に巻きついた触手の群れが結束して動き、それまで下に伸ばした姿勢の両脚を左右に広げはじめた。その意図に気づいて、キリカは脚に力をこめて、必死に抵抗した。

しかし砕魔拳を使えない状態では、触手たちの動く力にはとても抵抗できない。わざとゆっくりと時間をかけて両脚が広げられ、持ち上げられていく。

「ああっ！」

「ああっ」
キリカと守彦は似た声を発した。キリカは嘆きの声であり、守彦は感嘆の声だ。
見つめる守彦の前で、キリカは両脚をMの形に開脚させられた。
着ている衣服はいつもと同じだが、ショートパンツの黒いレザーが太腿の肉にきつく食い込み、逆に股間の女のふくらみを強調する体勢だ。ただでさえ卑猥なポーズなのに、からみついて蠢く触手に粘液をなすりつけられて、レザーも肌もテラテラとぬめ光っているのがいやらしい。
頭上でひとつに縛られた両腕も背後に引かれて、キリカは股間だけでなく、胸も前に突き出して、触手に絞り出された乳房を強調させられている。
毎日生活をともにしながら、けっして目にすることのないキリカの煽情ポーズを見せつけられて、守彦のペニスは亀頭を激しく振った。動くペニスから、魔女にぶっかけられた蜜乳の滴が飛び散る。
「くやしいわー」
強く反応する亀頭を、テミスの指が強くつかんだ。
守彦の裸体が震え、裏返った声が飛ぶ。
「ひいっ！」
悶える少年の裸身に、テミスがまとわりつき、巨乳を押しつけて、半笑いの怒った顔を

作った。
「あたしたちがこんなにサービスしているのに、もりりんたら、キリカちゃんのM字開脚に反応するんだからー。くやしいったらないわねー」
テミス本人が出した蜜乳にまみれたペニスを、褐色の両手でなでまわされる。
ヒルドも無言で、やはり蜜乳に濡れた睾丸をやわやわと揉んでくる。
強烈な媚毒である魔女の蜜乳に侵された男性器を責められながら、キリカのあられもない姿を見せられ、守彦の頭が深紅に染まった。
「うあっ、あああっ、キ、キリカさん、おふっ！」
身悶える守彦の姿を目にして、キリカも困惑するしかない。
（守彦……そんなに気持ちよさそうな顔をして……守彦をこういう目に会わせないために、わたしがいるというのに……はっ！）
今までにない不気味な感触が皮膚に走った。自分の身体に目を向けると同時に、キリカは生理的な嫌悪感に襲われ、全身が火照っているのに鳥肌が立ちそうになる。
ショートパンツの中にぬめぬめした触手が潜入しようとしていた。あわてて開脚させられた脚を閉じようとするが、太腿やふくらはぎを縛る触手の力には勝てない。身体が揺れるだけで、守彦へ向けて股間を突き出した恥ずかしいポーズを変えられない。
ぬちゃ、くちゃ、と不快な音を鳴らして、ショートパンツのレッグホールから次々と粘

つく触手が潜りこんでくる。
「ああっ、あひっ！」
恥丘の上を、クラゲのようにぶよぶよとした軟体がくねった。尻の谷間を、ミミズに似た力強い怪物がのたうつ。肉唇の狭間を様々な肉質の触手にこすられ、肛門の表面に粘液をなすりつけられる。
不思議と女の急所の表面をなでるばかりで、体内に押し入ってくることはない。それでも欲炎符に高められたキリカには、耐えがたい愉悦をもたらした。
「うっ、ううっんん、あああ」
快楽と同時に、不本意な物足りなさが生まれた。触手の粘液には媚薬作用があった。もともと欲炎符に燃やされている官能の業火が、さらに大きく、猛々しくなる。表面をなでられるばかりの女性器が、挿入を求めてキュウキュウと訴えた。肉唇が広がり、肉襞がざわめく。膣口の奥では筋肉が収縮して、肉壁が蠕動していた。今まで一度もアナルセックスなどしたことがないのに、肛門までも開閉をくりかえし、粘液を内部へ浸透させる。
「……あっ」
股間からせり上がってくる厭わしさと快楽に気をとられているうちに、キリカの周囲に新たな贄符が集まっていた。赤い紙面から新種の触手が大量に発生し、キリカの胸の黒いスーツの表面や露出した肌にたかってくる。

新たな魔物の触手は、四肢を縛っている触手よりも細くて白く、ある種の寄生虫を思わせた。そんなものの大群が、自分の胸の上でうねうねとのたうっているのだ。グロテスクで凶暴な怪物を見慣れた退魔師といえども、気味悪さに顔が引きつってしまう。

「うふふふふ。見た目はいやかもしれないけど、その子たちはとってもすごい特技があるのですわ」

メディアがそう言うのを待っていたのだろうか。とても知能などあるとは見えない怪生物の細い触手の先端が、いっせいにミミズの口のように開いた。口かなにかの奥から、黒い注射針のようなものが現れる。

「ま、まさか、ひっ」

息を呑み、宙吊りの身体を硬くするキリカの胸に、黒い針が次々と突き刺さった。

「きひいいいいっ！」

キリカの喉から、声帯を引き裂くような悲鳴が吹きあがる。

針がスーツを貫いて、あるいは直接、乳房に深々と潜りこむ。鋭い痛みがいくつもいくつも連続して走り、キリカは身体をぐらぐらと揺らした。

「ひっ、ひひい、ひあああっ！」

激しい痛みの中に、さらにおぞましい感覚が生まれた。胸に埋まった針の先から、熱い液体状のものが乳肉に注入される。魔物に肉体を汚されるという感覚が染みた。専門家で

あるからこそ、その恐ろしさを理解している。過去に、人間から別のものになってしまった犠牲者を何人も見ている。

戦慄するキリカの胸が、大きく脈打った。

「はひっ！」

心臓が鼓動を高くしたのではない。胸全体、左右の乳房そのものが、ドクドクと脈動をはじめた。

一拍ごとに、異常な変化がキリカを襲った。刺さったままの触手の針の苦痛はなくなる。かわりに乳房が膨張している。胸が脈打つごとに、胸のボリュームが増加して、スーツを内側から押し上げる。あまり伸縮性のある材質ではないスーツが、乳房の成長に合わせて伸びた。服までが、触手の針が分泌した魔毒によって変化している。

引き伸ばされたスーツの胸は、どんどん薄くなっていく。そのために乳首の変化もはっきり見えた。ひとまわり以上も巨大化して窮屈に押し合う左右の乳肉の先端で、乳輪がぷっくりと盛り上がる。その中心で、もともとは小さめの乳首がキリキリと肥大して、薄くなったスーツの表面に肉の筒の形をくっきりと浮き立たせた。黒く染まって見える乳首は、小指の先ほどにもなっている。

自分の肉体の変貌に目を見張るキリカは、さらに凄惨なことがおこなわれることを知った。

「あっ、や、やめて！」
膨張した乳房全体に針が刺さっているが、ただ二箇所、乳首だけは直接には魔毒を注射されていない。まだ被害に会っていない左右の勃起乳首の先端に、何本もの触手が迫ってくる。白い先端の口が開き、そろって黒い針を出した。
「そこには、刺さないで、くううううんっ！」
震える肥大乳首の先端や側面に、次々と針が刺さった。魔毒が一気に注入される。
「かひいいいっ！」
キリカは激しくのけぞり、たまらず膨張巨乳を盛大に揺らす。スーツを裂くばかりに暴れる乳房の先で、毒の餌食となった乳首がさらに肥大していく。
「おおうっ！」
スーツをさらに薄く引き伸ばして、乳首は親指の先のサイズと化した。
さんざん叫んだあげくに声を失い、キリカはただ口をパクパクと開閉させるだけになった。じっとしていても触手に吊るされた不安定な身体は揺らぎ、できたばかりの爆乳はゆさゆさと揺れる。
魔物に改造されたキリカの胸をながめて、メディアが鷹揚にうなずいた。
「どうかですかしら、守彦くん。キリカさんの大きくなった胸はとってもすてきで、魅力的でしょう」

たずねられた守彦は、まともに答えることもできなかった。赤く染まった顔を左右に振って、激しく身悶えている。

勃起をつづけるペニス全体に、テミスの薄布が巻きついて、絶妙な動きで亀頭から根元までをこすられているのだ。手とは異なる魔法の布のやわらかくサラサラした肌触りが、少年をえもいわれぬ極楽へと運ぶ。

「ほらほらー、気持ちいいでしょ」

笑うテミスの布が、男根だけでなく少年の身体のあちこちに巻きつき、愛撫される場所を広げていく。

「キリカちゃんだけじゃなくて、もりりんも新しい悦びを知るのよ。ヒルドちゃん、お得意の技をやってあげてー」

ヒルドは無言で口を開き、守彦の尻の間に冷たい美貌を近づけた。青い唇の中から、舌が伸びる。それはさっきまで何度もテミスとからめ合っていた人間の舌ではなく、蛇の舌と化していた。

唇と同じ青色に染まった蛇の舌が、守彦の肛門にずぶりと突き刺さり、一気に奥へと侵入した。

守彦の縛られた裸身がピンと硬直して、苦痛とも快楽ともつかない悲鳴をほとばしらせる。

「ほあああああっ！」
言葉では表現できない最初の衝撃が収まると、途端に峻烈な快感が肛門の奥に生まれた。尻の中でヒルドの舌が腸をつつき、上下左右に蠢き、前後に進むと、未知の悦楽の大波が連続して盛り上がり、全身をめぐる。
「あうっ、あああ、あひい」
テミスとヒルドに視姦される前で、悦楽に蕩ける少年の裸尻が小刻みにくねった。
護るべき守彦の恥態を見せられて、キリカは虚脱状態から意識をもどした。
「守彦！　そんなことは、はううっ！」
キリカの胸からいっせいに針が引き抜かれ、また悲鳴をあげさせられる。白い触手が離れると、交替にイカの腕に似た触手が襲ってきた。
しこりにしこりきった二つの肥大乳首を、触手の先端の幅が広くなった部分が包みこんだ。親指大の乳首全体が強く握られ、激しく揺さぶられる。
「きゃっひいいいい！」
乳首で想像を絶する巨大な快感が爆発した。閉じた瞳から涙がこぼれ、開いた口から唾液が飛び散る。縛られた身体が前後左右に大きく揺らぎ、触手の群れもつられたようにざわめいた。
爆発した快感はやむことなく、乳首が触手の蠢きに揉まれるたびに炸裂しつづける。よ

がり声を吐きつづけるキリカの頬を、メディアの右手がなでた。
「それこそ本当にすてきでしょう。キリカさんの乳首はクリトリスよりも敏感になって、たくさん気持ちよくしてくれるのですわ」
敵の言葉に、キリカは返事をすることも、反抗することもできない。ただ全身を震撼させる悦楽に翻弄されて、よがりつづけるだけだ。
「うふふふふ。いい感じに仕上がってきていますわ、キリカさん。いよいよ本番にチャレンジしていただきましょう」
メディアが両手でマントの内側に触れて、二枚の贄符をむしり取った。
「わたくしの自慢の特製の贄符を楽しんでくださいね」
指から離れた贄符が空中を躍った。
キリカの手足にからみついた触手が動きを変えた。キリカの脚が曲げられ、そのまま膝を地面に押しつけられた。膝立ちの姿勢にされると、ショートパンツの中で蠢いていた触手がいっせいに引いていく。乳首からも触手が離れる。
「んっ、ふあああっ！」
秘部を何度もこすられて、キリカは尻を振らずにはいられない。揺れるショートパンツからあふれた触手の粘液が、太腿を伝ってとろとろと流れ落ちた。
「あ、あああ……」

快楽はそのまま絶頂へと到達しそうになる。しかし抜け出た触手はもどってはこなかった。手足や腹に巻きついてキリカの行動の自由を奪うだけで、性感を刺激してはくれない。途中で投げ出された肉体が、せつなさを訴える。愛撫を求めて、ショートパンツの中で秘唇がひくつく。ひりひりと疼く肥大爆乳も、重たく揺れて新たな刺激を切望した。

しかし、意識は希望にしがみついた。

(解放された!?)

もしかして兎の会の誰かがこの異空間の存在を探知して、救援に来てくれたのかもしれない。媚融魔座は撤退をはじめたのかもしれない、と願わずにはいられない。

だが、新たな声が、キリカの希望を粉砕した。聞こえたのは仲間の呼び声ではなく、はじめて耳にする奇怪な鳴き声だった。

「ケルルルルルル」

カエルの鳴き声に似た音色だ。触手になすりつけられた粘液にまみれた顔を上げると、目の前に深い緑色の顔があった。空中に浮かぶ贄符から、新たな魔物が顔を出している。

「な、なに!?」

ズルリと贄符から出現した頭は、肉食性の大型の亀に似ている。ゴツゴツした頭には長い水草が密生して、先端から水滴を滴らせている。

「ケルルルルルルルルル」

水草つきの亀の顔が前へせりだすと、最初に闘った狼もどきや牛の魔物と異なり、ズルズルと肩が現れ、腕や胴体がつづいた。小さな紙の表面から肉体が出た途端、ミニチュアが実物大になるように、キリカの前に魔物の全身がそそり立った。

それは、いちおうは人間の体型をしていた。頭部は獰猛な亀だが、身体には二本の腕と二本の足がある。二メートル近くある全身は澱んだ沼のように濃い緑色をして、カエルの腹のようになめらかで、透明な粘液に覆われている。

胴体の横にだらりと垂れた両腕は、やたらと長く、掌が膝をつかめるだろう。粘液の下にたくましい筋肉が盛り上がり、見るからに人間の身体など簡単に引き裂けそうだ。武骨な指の間には薄い膜が張り、水かきを形成している。

逆に足は太く、短く、陸上を歩くには適していないように見える。

背中には岩のようにゴツゴツした黒い甲羅があり、頭から伸びる長い水草がまとわりつき、突起にからんでいる。

「ケルルルルルルルルル」

と、緑の魔物が鳴くたびに、口の奥から澱んだ水が流れ出し腐臭を放った。

キリカは怪物を見つめて、思わず声をあげた。

「か、河童！」

退魔師としての知識で、河童と呼ばれて日本中で親しまれる妖怪が実在することは知っ

ている。だが目にするのははじめてだ。河童が人間の女を犯して、子供を産ませるという伝承や民話も読んだ。

自分が民話の当事者になるとは、思いもよらなかった。

まさにひざまずかされたキリカの顔の前に、河童の腰があり、勃起した緑の皮に包まれた肉棒が突出している。睾丸は体内に収納されているのか、どこにも見あたらない。

「ケルルルルル」

男根そのものが鳴いたかのように、声とともにもともと大きな緑の棍棒がさらに体積を増した。キリカの顔に近づいた先端の皮がまくれて、沼色の液体がこぼれる。腐臭を放つ水とともに、ほとんど黒に近い緑色の亀頭が出てきた。

「うっ、くく……」

キリカは顔を引きつらせて、全身を震わせた。河童の全身からも不快な臭いがあふれているが、パンパンに張りつめた亀頭の悪臭は凄まじい。キリカの両手が縛られていなければ、即座に鼻を押さえている。

「キリカさん、わたくしが用意したイケメンは、気に入ってくれたかしら。九州でペットにした河童さんですのよ」

背後から聞こえるメディアの声に、キリカは首を曲げた。

「こんな河童を、あ！」

背後でも、贄符が魔物を吐こうとしていた。

赤い紙の表面から、ライオンと熊と馬とヒヒを混ぜ合わせたような奇怪な動物の頭が、左右に顔を振りながら、キリカのショートパンツの尻をめがけてせりだしてくる。人間離れした造形でありながら、人間のどす黒い悪意や欲望を感じさせる。

獣の顔の左右からは、二本の太い腕が生えて、空気をかいた。河童のぬめぬめした肉体と対照的に、全身に青黒い剛毛が生えた腕だ。

贄符から全身を現した魔物は、二本足で地面に立った。しかし、とても獣人と呼べるようなものではなかった。四本足の獣が無理やり後ろ足で立って、背筋を伸ばした体型だ。尻からはライオンを思わせるしっぽが垂れているが、そんなものはキリカの目には止まらなかった。

慄く視線は、獣の股間から生えるグロテスクきわまりないものを注視している。

刺々しい剛毛の中から、二本のペニスがそそり立っていた。縦に並んだ肉棒は、河童のモノ同様に、並の人間の男よりもはるかに太く長い。全体の形は人間と同じだが、肉幹にも亀頭にも瘤がいくつも盛り上がり、見るからに凶悪な容貌だ。

「もうひとりのイケメンも紹介しますわ。ドイツで捕獲したグスタフくんですのよ。シュヴァルツバルトの森の連続強姦殺人鬼として地元ではけっこうな有名人ですわ」

（こんな怪物に犯される！）

『第五章　魔女の淫宴を叩け！』より

　真っ先に乳首にとりついた触手が、乳首の中へ潜りこんできた。どういう方法をつかっているのか、地中を進むミミズのように、女の身体のなかでも特に敏感な乳首の中を通り抜けて、女のシンボルである乳房の内側へ侵入してくる。
「こんなこと、ありえないわ！　どうして、わたしの胸の中に入ってこられるの⁉」
「すごいでしょう。この触手は乳腺を広げて乳房に入りますのよ」
「そんな、乳腺を、ああっ、はううっ！」
　子供に母乳を与える大事な器官を、魔物にいいように改造される。考えただけでも、ふつふつと怒りと嫌悪が湧いてくる。湧いているのに、当の乳首から胸が溶けそうな快感が押し寄せて、一度は正気をとりもどしたキリカの意識を侵蝕する。
（あ、ああ、気持ちいい、どうして、これほどひどいことをされているのに、気持ちいいのよ）
「うふふふ。キリカさん、気持ちよさそうな顔をしていますわ。それも当然です。触手たちはただ乳腺を広げているだけではなくて、性感帯にしてくれますの。乳腺の中を触手が通るだけで、気持ちよくてたまらなくなるように改良してくれるのですわ」
「そんな、ひどすぎるわ、あひいっ！　また別の触手が入ってくるう！　はああっ、ひどい、また、また、いっぱい入ってくるうっ！　はおおう！」
　二つの乳首に、次々と触手がとりつき、中へ入ってくる。他の触手に比べてはるかに細

いとはいえ、乳首もたいして太いものではない。一本二本と入るたびに、乳首が内側から押されて太くなっていくのが目に見える。

（き、気持ち悪い……でも……）

嫌悪感を顔に浮かべようとしてもできなかった。自分の顔がだらしなく弛緩しているのがわかる。胸の中を触手が動きまわっている感覚が、そのまま快感に直結している。

（気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪いはずなのに……）

「気持ちよくて、たまらないのでしょう」

メディアが言葉を継いだ。いまや十二本の触手が、メディアとキリカの乳首をつないで、うねうねと蠢いている。普通の人間なら、ひと目見ただけで気絶する姿だ。

「そうよ、気持ちいいのよー」

と、背後からテミスが顔を出して、二本の触覚を揺らした。

「その触手をおっぱいに入れているとねー、毎日とっても気持ちよくて、しばらくするとこうなっちゃうのー♪」

テミスが胸からパープルのブラジャーを取った。チョコレート色の巨乳が解放され、重みでわずかに下がってぷるんと揺れる。日本人には出せないエキゾチックな魅力を凝縮した豊乳を、テミス自身の手が強く握った。

「んんっうん！」

茶褐色の乳首がすばやく勃ち上がり、先端から白い体液が飛び散った。甘ったるい香りの液体が、キリカの右肩や腕にふりかかる。粘ついた白い水滴が肌を流れていく感触が、普通の母乳ではないと告げている。

「はあああ、メディア様の胸の触手をしばらく入れておくと、この蜜乳が出るのよ。またこの蜜乳を出すときが、射精みたいに気持ちいいのー。ねえ、みんな」

ヒルドがボディコンを脱ぎ捨てて、胸を出した。シルシュとシロッホも黄金のビキニ鎧の胸パーツをはずす。キリカをとりかこんで、魅力のあふれる大きな乳房がずらりと勢ぞろいした。いっせいに自身の胸を搾り、八つの乳首からいっせいに白い蜜乳が飛んだ。

「ああっあん！」

「はううう！」

「おおおううっ！」

「あひいっ！」

キリカの背中が魔女たちのミルクでベトベトにされる。甘ったるい匂いが立ちこめて、酔ってしまいそうだ。

「ああああ、われながらいい香りー。すばらしいでしょー。キリカちゃんもこうなりたいでしょ」

四人の魔女たちが、背後から甘い滴を垂らす乳首を押しつけて、肌をベタベタにしてく

る。キリカは鼻腔につまる甘い芳香にむせかえりながら、早口でどなりつけた。
「おまえたちはもう人間じゃないわ！　本物の化け物よ！　ひきいっ！」
キリカの鈴口に異様な感覚が走る。息を呑んで下半身へ目を向けると、乳首に侵入しているものと同じ白く細い触手が、勃起したままの亀頭にたかっていた。触手を目で追うと、今度はメディアの股間からあふれている。
赤いシースルーのボディスーツの下腹部が左右に開いて、中の女肉を露出させていた。メディア自身を見せつけようと、ひとりでに左右に大きく広がった秘唇の中に、鮮やかなピンクに輝く肉の花びらが重なっている。その奥の膣口と尿道口から白い触手があふれて、キリカの股間へとたかった。
キリカは必死に逃れようとするが、四人がかりで身体を押さえつけられては、腰をくねらせるしかできない。少しでも触手を引き剥がそうと、懸命に勃起ペニスを振りたくった。しかし触手の群れは亀頭から根元まで巻きついて、どうやっても離れない。
「や、やめ、あああ！」
考えるだに恐ろしい感覚が、現実に亀頭の先で起こった。乳首と同じように、触手が鈴口に入りこみ、尿道を逆向きに侵攻してくる。
「は、入ってくるう！　ひぎいいいっ！」
キリカの身体がそりかえり、歯がカチカチと鳴った。女の身体に男のシンボルが生えて、

射精の快楽を知るだけでも異常なことなのに、尿道にものを押し入れられるなど男でも体験しないことだ。普通の男がペニスに触手をつめこまれたら、どう感じるものか、想像もつかない。

しかし魔法で造られた男根と、侵入した肉体の部分を性感帯に変える触手の組み合わせは、文字通りこの世のものとは思えない凶悪な快感を生みだした。膣や肛門よりもはるかに狭く窮屈な肉の穴を、何本もの触手に押し広げられ、内側からぐねぐねと刺激される感触は、悦楽としかいいようがない。

「あああっ、うそ、こんなことが、ひいっ、気持ちいいはずがないわ！」

「わたくしもふくめて、ここにいる女は全員同じ喜びを体験していますわ。みんながおちんちんを内側からしごかれる悦楽の虜になって、何度もくりかえしたのですわ」

「うるさい、変態！　おまえたち怪物と、わたしをいっしょにしないで、はぎいいいっ！　くおおおう！」

ペニスだけでなく、膣と肛門にも、からまり合って束になった触手が挿入された。普通の男根とは違い、柔軟に曲がり、自由自在によじれる触手で粘膜をかきまわされると、快感がペニスと共鳴して、身体全体が砕けそうになる。

「あああっ、いいっ！」

キリカはついに喜悦の声をほとばしらせてしまう。一度口にしてしまえば、もう止める

ことはできなかった。大きすぎる快感を訴えつづける。
「いいっ！　はひいいっ、気持ちいいっ！　ああっ、また、また出ちゃうっ！」
異様な快楽を燃料にして、精巣がフル稼働する。魔法の臓器ならではの無限の生産力が、膨大な量の精液を続々とペニスへと送りこむ。
しかし、尿道には何本もの触手がつまっていた。特にペニスのつけ根部分には、触手がからまり合い、玉となってしっかりとふさいでいる。そこへ精液が押し寄せても、巨大なダムに激突した洪水のように、せき止められるだけだ。
「うあああっ！　出ない！　射精できなひい！」
叫ぶキリカの前で、触手が次々とちぎれた。本体というべきか、宿主というべきかわからないが、メディアの身体から分離した触手の群れは、現れた場所へもどる素振りは見せず、キリカの乳首とペニスの中へずぶずぶと入っていく。
「ひいっ、無理、それ以上は入らない、いやあっ、やめて」
それまで外に出ていた触手の一部が入ってくれば、当然のごとく屹立乳首も勃起ペニスもさらにふくらみ、ギチギチに硬くなる。強烈な圧迫感がそのまま体内で凄まじい快楽に変換された。キリカは顔を左右に振り、髪を乱して、絶頂の言葉を叫ぶ。
「イクッ、イクイクうっ！　あああっ、射精できないいっ！」
メディアがにっこりと笑い、両手でペニスを握った。

キリカは目を剥き、反射的につま先立ちになる。
「ひうっ！」
外側からペニスを握られると、ますます尿道内の触手の存在を明確に感じてしまう。新たな刺激がさらに射精を呼び、尿道内で触手と精液がぶつかり合った。
メディアは容赦なく両手を上下に動かし、触手入りの勃起をしごきたてる。
「ひいいっ！　おおおっ！　やめっ、手を離して！　はっううう！」
精液を出したくても出せない苦しみと、内外から加えられる激烈な快感が、キリカの全身を熱く狂わせる。意地もプライドもなく、敵に懇願した。
「お願いよ、出させて！　精液を出させてぇ！　このままでは気が狂っちゃう！」
「あらまあ、キリカさんも素直になってきましたわね」
座長の感嘆の言葉に、四人の魔女が笑いさんざめく。八本の手がキリカの尻をなでまわし、胸を揉み、脇腹をくすぐった。
「もちろん、射精させてあげますわ。でも、条件がありますわ」
メディアの暖かい音色の言葉を聞かされ、キリカは知らず知らずに涙をこぼした。
「早く！　なんでもいいから、早く出させて！」
「それじゃあ、あの人たちに頼んでくださいね」
メディアの先祖たちの肖像画の間にあるドアが開き、どやどやと十数人の人物が部屋に

入ってきた。先頭を歩く男の姿を目にして、キリカは一瞬、焼けつく射精への焦りを忘れた。あまりにもよく知っている人物が、全裸に立派な逸物をそびえさせた姿で迫ってくる。

あまりスマートとはいえないふくよかな裸身の上には、大黒様を思い出させる福々しい顔が乗っている。

「坂出先生！　どうしてこんなところに！」

「もちろん、わたくしたちが兎の会を襲って、捕まえて、幻術をかけたのですわ。キリカさんを仲間にするのに、少しは役に立つかと思ったのですのよ」

「そんな勝手なことを、ああうっ！」

尿道の中で触手が暴れて、キリカは抗いの言葉をかき消される。

キリカの身体を捕まえていた魔女たちが手を離すと、そろって背中を押した。キリカは快感で足腰が痺れてまともに歩けず、よたよたと進み、男たちの前で尻をぺたりと床についた。その軽い衝撃で、新たな射精欲求が湧き起こり、亀頭がビクビクと上下する。

「あっ、あああああ！」

床の上で尻をくねらせ、肩を上下させる。触手を潜らせた巨乳もふるふると揺れ動いて、とめどなく快感がだだもれした。

引きつる顔を上げると、すぐ目の前になかなか立派な肉棒が勃っていた。濃い陰毛に飾られた睾丸のボリュームもたくましさを感じさせる。かなり前にせりだした腹も、貫禄を

表現していた。はじめて見る裸体だが、人格者らしい顔はよく知っている。
「坂出先生……」
気がつくと、キリカは裸の男たちに包囲されていた。見知らぬ顔も三人いるが、あとは兎の会の関係者だ。退魔師もいれば、会の事務を支える職員もいる。
全員がキリカの煽情的な衣装と肉体を前にして、分身を高くもたげていた。
「坂出先生、渡辺さん、山村くん、のぐっちゃん、みんな、しっかりして！」
キリカの言葉は、まったく通じていないようだ。欲望に瞳をぎらつかせた顔つきは、普段とはまったく別人だった。皆の名前を呼んでいる間にも、ペニスを中心に、全身がズキズキと疼いてたまらない。
（坂出先生たちと交われというの……そんなことは……）
キリカの感覚では、敵の魔女たちに嬲られるよりも避けたいことだった。しかし声をかけたくらいで、男たちが正気にもどるとも思えない。それでも呼びかけないではいられなかった。
「坂出先生、わたしは、ああっ！」
周囲の床の表面に赤い贄符が現れた。今回も赤い紙の表面から太い触手が伸びた。キリカは抵抗する間もなく、手足に巻きつかれて、仰向けになった状態で床から持ち上げられた。触手によって手足を大の字に広げられて空中に浮いた高さは、ちょうど男たちの腰の

位置、いや、勃起の位置だ。
大きく開いた両脚の間に、何人もの男が集まって、遠慮なしに無防備な股間を凝視してくる。下半身よりも巨乳が好みの男たちは、身体の左右から顔を近づけ、スーツの穴からはみ出した乳房と乳首をじっとにらんだ。
「キリカちゃん」
と、太い声で名前を呼ばれた。頭をのけぞらせると、まさに鼻先に赤黒い亀頭がある。
（これが坂出先生の……）
感心する間もなく、唇に亀頭を押しつけられた。タイミングを合わせたかのように、乳房とペニスで触手が騒ぎ、キリカは大きく口を開けてしまう。
「あひっ、うぐうっ！」
すかさず坂出先生の亀頭が、逆さに開いた口の中につっこまれた。長い指で顎をつかまれ、太い亀頭を喉の奥まで一気に押しこまれてしまう。
「おごっ、おぶふっ、うくぐんっ！」
キリカが喉をえずかせるうめき声が合図となって、四方八方から手と肉棒が同時に殺到した。何本もの手が服を引き裂き、露出を増やして、肌をなでまわす。手と手の間には、早くも先走りの体液を垂らした亀頭が次々と押しつけられ、愛撫というよりも自慰をはじめる。キリカ本人のことなどまったく考えていない傍若無人な男たちの蛮行も、触手のせ

いで敏感になったキリカの身体は、愛撫として受け取った。爪をたてられた腹から、快感の火花がスパークする。亀頭をなすりつけられた二の腕が、もっと嬲ってほしいと訴える。

なによりもスーツを引き裂かれて完全に解放された膨張爆乳を、何本もの手で握られ、引っぱられ、こねまわされ、肥大乳首をしごかれると、目もくらむ快感の閃光が連続した。外からの横暴な刺激に呼応して、乳房の内側でも触手がのたうちまわり、内と外から快楽を際限なく高めていく。

「おぼぼおううう！　うぎい、んぐぐぐほおお！」

坂出先生の巨砲でえぐられる喉の奥から、意味をなさない喘ぎ声が次から次へとあふれては、涎とともに床に落ちた。

女体の中心には、やはりキリカがよく知っている中年男のモノが突き立てられていた。兎の会でもベテランの退魔師で、奥さんと二人の息子と娘を紹介されたこともあった。魔物と闘っているときは別として、普段は温厚で、ガーデニングを愛し、家族思いのやさしい好人物だ。

その退魔師にして良き家庭人たる渡辺信也（しんや）が、眼球を血走らせて、鼻の穴を大きくして、キリカの股間に腰を叩きつけている。人生の経験豊富な渡辺が持っているセックステクニックはなにも使わずに、力まかせに女穴を掘っている。

これほどひどい責めでも、触手に淫らな火をつけられたキリカの膣は、最上の悦びに変

えていた。膣で燃える淫らな炎が、射精を封じられたペニスにも延焼する。いよいよ切迫した射精の欲求は、キリカを発狂させかねない。

射精を欲して燃え狂う肉棒に多くの手が伸びて、亀頭も、肉幹も、揉みくちゃにされた。これが本物の男のモノなら。乱暴にあつかわれて激痛が走っているだろう。メディアから与えられた魔法のペニスは、どれほどひどくされても、すべてを快感としてしまう。いたぶられるほどに尿道につまった触手たちが喜んで暴れて、いよいよ射精を呼び起こした。

「おおおおごお、うぐうぶぶ、んぐううう！」

（だめっ！　出させて、お願い、出させて！　精液、出させてええっ！　んっううう！）

坂出先生の亀頭が射精をはじめた。熱い精液が奔流となって、食道から胃まで一気に流れた。同時に渡辺信也も膣の奥深くまで男根を押しこみ、精液をぶちまける。

キリカの肌にペニスをこすりつけていた十人以上の男たちも、メディアが指揮をしているのか、本当に同時に射精をはじめた。大の字で浮かんだ女体に、濃密な白い粘液が雨のように振りかけられ、どろどろにまぶされる。

大量の精液の匂いで、キリカの息がつまりそうになったとき、ついに待ち望んだときがやってきた。

鈴口が内側から大きく拡張された。それまでけっして外へ出ようとしなかった触手たちが、一塊になって天井高くまで飛び出した。

「ひいいいいっ！」
触手の後を追って、待ちに待った精液が尿道をどっと駆け登る。さらに亀頭がふくらみ、鈴口も大きくなった。今にもキリカの男根が破裂しそうに見える。
「おおおうううっ！」
精液が噴火した。
「出るうっ！」
精液が飛翔した。
「出るううっ！」
キリカは自分の全身の肉体と、心と、魂が、すべてどろどろに溶けて、鈴口から排出されていると思った。自分は消えてなくなり、後に残るのは精液の池に浮かぶ一本のペニスだけだ。
「出るうううううっっ!!」
じつに一リットルあまりの射精を終えたときには、キリカは空中に持ち上げられたまま、全裸の男たちにかこまれて、意識を失っていた。
「うふふふ。いよいよ仕上げですわね」
メディアは白目を剥いて気絶するキリカから守彦へ、視線を移した。
まだ子虎と子豹と蛇に嬲られて、新たに射精をしている守彦の恥態を見つめて、メディ

アは確信した。
「ついに悲願を達成できますわ」

＊

「キリカさん」
声が誰のものか、すぐにわかった。目を閉じていてもわかる。守彦が呼んでいるのだ。
（目を閉じてる？）
「キリカさん」
また声が聞こえた。
（どうして、わたしは目を閉じているの？　そうよ、死ぬほど射精して、気絶してしまったんだわ。最悪よ）
そこまで思い至って、キリカの重いまぶたが開いた。
目を開くと同時に、キリカは立ち上がり、すばやく身がまえた。
「あれ？」
部屋が変わっていた。最新のオフィスに魔女らしい物品を並べた部屋ではなく、普通の応接室だ。床には毛足の長いふかふかの赤い絨毯が敷きつめてあった。絨毯の上にはダークブラウンの革のソファセット。椅子の間にはテーブルが欲しいところだが、置かれてはいない。おかげで室内がかなり広く見える。天井には小型のシャンデリアだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/